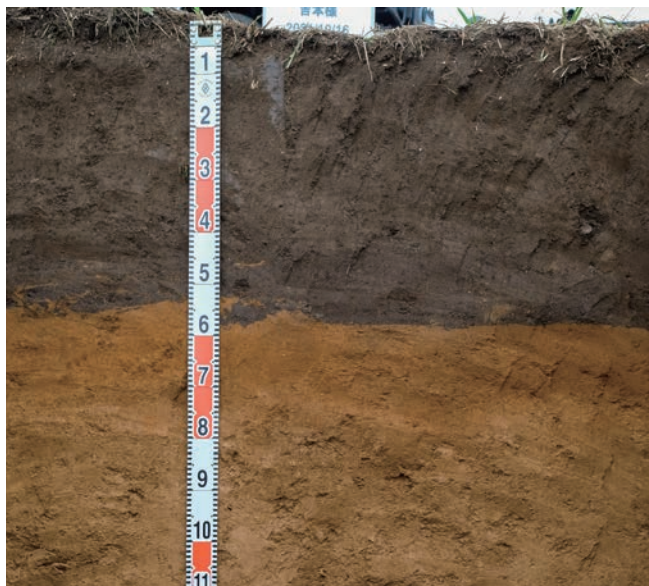


# 北海道土を考える会 十勝エリア 土壌断面調査勉強会を開催しました。

2021年11月6日

北海道土を考える会は、10月17日(日)に十勝エリアでの土壌断面調査勉強会を実施いたしました。現地でも調査していただいた農研機構 農業環境変動部門(農環研)の前島勇治先生よりのコメントと合わせてご報告させていただきます。

## 北海道河西郡芽室町新生 吉本農場(エン麦、前作:小麦)



伏古台地に樽前山、恵庭岳から噴いた火山灰が厚く堆積してできた土です。深さ50cm以上の暗褐色の作土とカボチャ色の下層土の境界がくっきりしているのは、プラウ耕と心土犁の爪がここまで達している証拠です。土壌断面を通じて保水性・排水性ともに良好で、硬く締まった耕盤層が形成されていないため、エン麦の根は深さ70cmまで達しています。長年の有機物(堆肥・緑肥など)施用とプラウ耕の併用による“匠の土づくり”が表現された土壌断面といえます。



## 北海道河西郡更別村 吉田農場(ビート畑)



中札内台地の礫層の上に樽前山の火山灰が堆積してできた土です。厚さ40cmの真っ黒な作土、褐色の粘土質な下層土、そして60cm以深は礫層へと続いています。この礫層は角のとれた円い石ころのため、かつて台地を流れる川によって運ばれてきたのでしょう。保水性・排水性ともに良好で、かつ耕盤層は形成されていないため、ビートの根が礫層まで達しています。有機物(鶏ふんなど)を施用し、下層の石礫を表土に持ち上げることなく、絶妙な塩梅でプラウ耕が入り、“職人技”を感じとれる土壌断面です。



十勝エリアで、調査が実施できるのは、収穫後～土壌凍結前の非常に限定的なタイミングとなりますが、参加者の方々からは、「マニアックだけど、面白い」、「次は〇〇さんのところだね!」との声が上がっておりました。